

四〇

月夜に「梅の花を折りて」と、人のいひければ、
折るとよめる
みつね
月夜にはそれとも見えず梅の花 香をたづねてぞ
しるべかりける

【語釈】

●「梅の花折りて」

「て」は完了の助動詞「つ」の命令形。「てよ」というのが普通。口語か。(集成)

●それとも見えず

月光に白い花の色が紛れて、どれが花だかわからない。「それ」などの語は下に打ち消しがある場合、「どれ」のように訳す。なお、「それとも」を「見れども」とする古写本もある。(新全集)

●べかりける

「べかり」は可能の助動詞。「ける」は上の「ぞ」と呼応し、たずねるべきだと初めて分かった、の意。(新全集)

【通釈】

月夜に「梅を一枝折ってください」と人が言うので、
折ろうとして詠んだ歌

月夜には、白い光に紛れて梅の花の見分けがつかないことだ。そのすばらしい香りをたどって探すことで、そのありかを知ることができのるのだなあ。

【補釈】

・『白氏文集』卷二 諷諭・答桐花に

山木多蓊鬱 茲桐獨亭亭

葉重碧雲片 花簇紫霞英

是時三月天 春暖山雨晴

夜色向月浅 暗香隨風輕

という箇所があり、花の姿は見えない闇の中を、香が漂うという景は漢詩に好んで読まれた。(『新大丞』参照)

四一

春の夜の梅の花をよめる
春の夜のやみはあやなし梅の花 色こそ見えね香
やはかくるゝ

【語釈】

●あやなし
・(あや・な・い)【文無】

筋が通らない。理屈に合わない。不条理なことである。無法である。(用例は当歌が最初に挙げられている)和語として上代に用例が見いだせないのは、漢語に由来する可能性を示唆するとも考えられる。(『日本国語大辞典』)

・「文(模様)なし」が原義。筋道が立たないの意。同じ作者に『拾遺集』・一六

齋院御屏風に

香をとめて誰折らざらん梅の花あやなし霞立ちな隠しその歌がある。(集成)

●香やはかくるゝ

・匂いが隠れるだろうか、隠れはしないじゃないか。「やは」は反語の意。(新全集)

【通釈】

春の夜の梅の花を詠んだ歌

春の夜の闇は無意味なことだ。梅の花の色、姿はたしかに見えなくなってしまうけれど、この香りは隠しようがあるだろうか。いや、隠しようがないはずだ。それなら、その梅の色も見せてくれたらいいものを。

【補釈】

・「暗香浮動(梅の香が闇の中を漂うこと)」という当時の人の常識に何か一つの新しさを付け加えようと苦心した結果が第二句の「闇はあやなし」である。(新全集)

【配列】

くらふやまにてよめる

つらゆき

三九 うめのはなにほふはるへはくらふやまやみにこゆれとしるくそありける

つきよにうめのはなをおりてひとのいひければおるとよめる みつね

四〇 つきよにはそれともみえず うめのはなかをたつねてそしるへかりける

はるのよのむめのはなをよめる

四一 はるのよのやみはあやなし うめのはないろこそみえねかやはかくるゝ

はつせにまうつることにやとりけるひとのいへに

ひさしくやとらてほとへてのちにいたれりければ

かのいへのあるしかくさたかになんやとりはあると

いひいたしてはへりければそこにたてりけるうめの

はなをおりてよめる

つらゆき

四二 ひとはいさころもしらすふるさとは はなそむかしの かにほひける

●三九〇番歌は暗闇の中に漂う梅の香を詠んだ歌である。

●三九・四〇番歌では「しる」と「ける」で韻を踏むかたちになっており、ここにも古今集における漢詩の影響の強さが窺えるだろう。

【参考文献】

『新編日本古典文学全集』 小学館

『新潮日本古典集成』 新潮社

『新日本古典文学大系』 岩波書店

『白楽天全詩集 続国訳漢文大成』第一巻 日本図書センター